

東北大学出版会 会報

第32号

雷

おおぞら

〒980-8577
仙台市青葉区片平2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
www.tups.jp
info@tups.jp

2019年9月



α星

『自閉症とアスペルガー症 候群 対応ハンドブック』

自著を語る

仁平 説子

子どもにまつわる不幸のニュースが続いています。いじめられたことによる自殺、虐待待児の死、不登校の増加、理解の枠を超える犯罪など。これらの不幸の中に、自閉症やアスペルガー症候群などの対人関係の障害が背景にある場合があることはすでに知られています。これらの障害を抱えた子どもが年々増しているのを実感する今、すでにまったなしの状況であるとの危機感を抱かざ

るをえません。筆者は臨床発達心理士として、それらの障害を抱える子どもとかわり、子どもたちの喜び、心の痛み、苦しみ、辛さにふれてきました。かれらが社会を生き抜いていく過程の大変さは想像を超えるものです。子どもたちが不幸に陥ることなく、その特質が活かされ、落ち着いた人生を送るためにどうすればよいのでしょうか。本書を出した大きな動機はこの思いでした。

対人関係の基礎である「やりとり」機能を生まれながらにもつ子どもは、通常の子育てや保育、教育で成長を遂げます。親は愛情を注ぎ、しつめます。保育士や幼稚園教諭は遊びや活動を提供し、社会性の基礎を教えます。学校の教師は知識や教科スキルが獲得されるよう教育します。主張のぶつけ合いや協調を通して、友だち関係が築かれていきます。これらすべては自己と他者の意思や

感情の「やりとり」が基盤となり成立します。自閉症とアスペルガー症候群はこの「やりとり」機能の障害なのです。その診断要件のちがいにより、自閉症、アスペルガー症候群などに分類されています（WHOの診断基準ICD-10）。

ところが、二〇一三年、日本でも使われているアメリカの精神医学会の診断基準の改訂があり、下位分類（自閉性障害、アスペルガー障害など）は「自閉症スペクトラム障害」という名称に一括されました。この影響は大きく、それぞれの特質に応じた対応が明確でなくなっています。しかしながら、名称が変わっても、それぞれの特質は変わることがありません。ちがう特質にはちがう対応です。本書は、症例が特質理解の本筋であると考え、自閉症の原典といえるL・カナー（一九四三）の症例とアスペルガー症候群の原典といえるH・アスペルガー（一九四四）の症例を対比させ、そのちがいを浮き彫りにし、それに応じた対応の指針を打ち出しました。

「よいかたち」は自閉症の対応の指針、「よいこせい」はアスペルガー症候群の対応の指針とし、それらをアクロニムにし対応の基本を簡潔なフレーズであらわしました。日々のかかわりの中で基本対応を頭に思い浮かびや

すくするためです。

今日、それでも、これらの特質をもった子どもの増加、平均以上の知能をもつ自閉症やアスペルガー症候群のわかりにくさ、一クラスに複数在籍するこれらの子どもたちに対応しきれない現状などがあって、特質をもった子どもと周囲との不調和がなくなることはありません。その不調和は、身体・精神症状、暴力、不登校、自傷、反社会的行動などの形であらわれることがあります。

他方、かかわる養育者、保育士、教師は対応に悩み、迷うことが少なくありません。障害の本質がかかわりそのものだからです。かかわりの質を理解しながら対応することは並大抵のことではありません。いったん自分の枠組みを外し、子どもへ歩み寄ることが必要です。「あゆみより」の基本姿勢もアクロニムの形であらわしました。「あゆみより」を介して、子どもは大人のかかわりを受け入れます。それを通して、子どもはスキルや知識を獲得し、また、人への信頼感情や自尊心を培っていきま

す。

「よいかたち」「よいこせい」「あゆみより」であらわした対応の基本が子どもたちの成長に活かされること

が、この対応ハンドブックの目的であり、筆者の願いで

あります。

(にへい) せつこ・臨床発達心理士 昭和四九年東北
大学大学院文学研究科修士課程(心理学専攻) 修了)

仁平説子 著

自閉症とアスペルガー症候群 対応ハンドブック

四六判・二五六頁・定価(本体二八〇〇円+税)



星

情報に関わる制度のこれから

蘆 立 順 美

「知的財産」という言葉を見聞きしたことがない人は、現在は、ほとんどいないだろうと思うが、こうした言葉が浸透したのは、ここ一五年のことである。

私の専門は、知的財産法という比較的新しい法分野であるが、実は、「知的財産法」という名の法律は存在しない。著作権法や特許法、商標法、不正競争防止法、種苗法といった個々の法律を総称して、知的財産法と呼ばれているのである。そのため、ニュースや新聞等では、小説の盗作の問題も、発明に対する対価を巡る争いも、営業秘密である技術流出の問題も、すべて知的財産の問題として扱われることになる。これらは、「情報」の保護や利用に関わる問題であるという点で共通点を有している。

知的財産法の中でも、著作権法は、映画・音楽業界はもちろん、出版業界とも関わりが深い。ちなみに、私のはじめての著書は、二〇〇二年に東北大学出版会から刊行された中村維男編著『情報技術と社会』だった。この

書籍は、インターネットの発達が社会の様々な側面に与える影響について、複数の研究者が各専門分野から解説を行うもので、その中で、「インターネットと著作権」というタイトルで論稿を執筆する機会を与えられた。

現行の著作権法が制定されたのは一九七〇（昭和四五）年であるから、当時、著作物を世に出したり、広く頒布したりするためには、レコード会社や出版社等を経なければならなかった。そのため、著作権法は、事実上、こうした業界（公の領域）のみに関係するものにとどまっていたし、多くの個人は、基本的に、著作物を受け取る立場でしかなかった。ところが、インターネットの出現によって、誰でも、簡単に著作物を複製、改変したり、広範囲に著作物を発信したりできるようになると、すべての人が、権利者にもなり、かつ、侵害者にもなる。前述の書籍では、こうした変化に対し、著作権法がどのように対応してきたか、そして、個人の生活（私的領域）にも著作権法が大きく関与する状況において、著作物の享受や創作行為を妨げないために、法的な保護はどうあるべきかという問題等を紹介した。

そこから一五年余りが経過したが、情報技術の発展はとどまるところを知らず、SNSや動画配信技術など、

情報の利用・発信手段が多様化し、通信の速度やデータ量も格段に増大したことに加え、AI（人工知能）の出現など、状況は大きく変化している。

出版業界においても、電子書籍が一般化するなど、情報の発信、享受の方法が変化している。技術の発達により、著作物の利用や普及が簡便、容易となるのは歓迎すべきことである。しかし、すべての人が高度な情報発信技術を手に入れた社会であるからこそ、著作物の伝達者である出版社が果たすべき役割とは何かという問題が、改めて問い直されているように思われる。

同様に、著作権法においても、新たな技術や課題に対し、個別に対応を重ねるという方法には、限界も見えてきている。創作活動においては、コンピュータやAIの活用が進んでおり、それに伴い、創作物の持つ価値も多様化し、変化しつづつあるのではないだろうか。このことは、保護すべき「著作物」の概念自体にも再検討を迫るものとなり得るかもしれない。技術の進展によって変わるべきもの、変わるべきでないものを見極めがますます重要となっている。

著作権法の目的は、文化の発展に寄与することにある。これからの社会において、文化の発展を支援する制度で

あり続けるために、著作権法制度そのものあり方が問われる時期にきている。

(あしだて まさみ・東北大学大学院法学研究科教授、知的財産法、平成八年東北大学法学部卒業)

〔新刊〕

石川洋著

力学入門

A5判・二〇〇頁・定価(本体一〇〇〇円+税)

野村啓介著

ヨーロッパワイン文化史

銘醸地フランスの歴史を中心に

A5判・二四四頁・定価(本体二二〇〇円+税)

東北大学大学院文学研究科講演・出版企画委員会編

人文社会科学講演シリーズ⑩

ハイブリッドな文化

四六判・二〇〇頁・定価(本体二二〇〇円+税)

堀勝義著

がんの治療を阻む生体のしくみ

A5判・二四二頁・定価(本体四五〇〇円+税)



γ星

生命分子の起源を探る

古川善博

自然科学の研究分野の中には既にかなり理解が進んでおり教科書が出来上がっている分野と、未だに謎だらけでコンセンサスを得られる教科書など書けない分野がある。生命の起源はまさに後者の代表例であろう。その理由はいくつかあるが、地球科学的な側面から言えば、地球上に当時の地層が極めて限られており、その地層も変成が進んでおり、当時の環境や生命、有機物の記録がほとんど残っていないことであろう。さらに根本的には現代科学では生命という複雑なシステムの作り方を理解できていないことに大きな原因がある。我々が理解しているのは進化の成れの果てにいる現代生命の仕組みの一部にしか過ぎないのである。そう考えていくと、生命の起源を明らかにするにはとてつもなく大きな壁が立ちほだかっているように思える。一方で、これまでに研究が進み学問分野として確立され教科書に書かれてきたような分野でも、その黎明期には当時の研究者が絶望的に大

きな壁に立ち向かったのであろうと思うと、壁が高いことは研究対象とならない理由ではなく、むしろ伸び代があると認識するべきかもしれない。幸いにも私が研究対象としているのは、広い意味では「生命の起源」だが、狭い意味で言えば「生命分子の起源」であり、大難問の生物と有機物の境界については専門としていない。それでも、生命分子の起源についてだけでも難題が山積している。

地球科学を基に研究を進めている私は、生体高分子を構成する糖や核酸塩基、アミノ酸がどのような地球惑星科学的現象でどれだけ供給されるのか、さらにはどのような環境でそれらのモノマーがポリマーになるのかを明らかにしようとする研究を進めている。アミノ酸や核酸塩基などの起源は地球で形成されるといふ研究者と宇宙から来たといふ研究者がいる。メディアのインタビューなどではどちらから来たかと思えますか？と聞かれることが多い。これに私は両方からと答えることにしている。両方の過程があり得て、両方の過程がよくわかっていない、わかっていない両方の過程を合わせても現在のバイオマスよりは遥かに少ない量のモノマーの供給しか期待できないことが大きな問題となっている。

地球での生成過程については初期地球環境を基にした再現実験による検証が進んでいる。隕石の衝突による有機物生成や雷放電による有機物生成がアミノ酸と核酸塩基の起源として議論されており、私自身は隕石衝突による生成を研究している。糖の生成は意外にも難しくないが、反応性が高いゆえにその蓄積環境を見出すことが難題となっている。初期地球における生命分子の蓄積量とその環境の推定には、初期の地球惑星環境の更なる理解に加えて、再現実験と数値計算を組み合わせたアプローチが必要となるであろう。初期地球環境については、微小分析技術の発展によって、冥王代にできた鉱物や隕石中の鉱物など、限られた試料からでも幾らかの情報を引き出せるようになり、理解が進みつつある。

一方で、これらの分子は隕石や彗星などの地球外物質からも検出されていることから、それらに乗って地球外から供給される過程もあったはずである。しかし、地球外から来た分子の種類や量は依然として不明であり、これを明らかにするためにも、初期の地球惑星環境の更なる理解が必要である。幸いにも惑星探査のトレンドが生命の起源にモチベーションを移しつつあることによつて、はやぶさ2による小惑星からのサンプルリターンが

進行したり、火星の生命探査が計画されたりしている。このように、生命分子の起源については多角的なアプローチが進んでおり、生命の起源解明というとてもつもの高い壁に登るための階段の第一段階はおぼろげに見えつつあるのかもしれない。

(ふるかわ よしひろ・東北大学准教授、地球化学、平成二二年東北大学大学院理学研究科博士課程修了)

〈新刊〉

【東北大学出版会ブックレット003】

花輪公雄 著

東北大生の皆さんへ

教育と学生支援の新展開を目指して

A5判・二一八頁・定価(本体九〇〇円+税)

新妻弘明 著

科学技術の内と外

四六判・二九八頁・定価(本体二八〇〇円+税)

私の本棚



δ星

活字好き
紙でも電子でも

大隅典子

このたび「私の本棚」への寄稿を求められましたが、最近の私の本棚は、リアルな書籍に加えて、電子版が増えてきました。ご惠贈頂いた本でも、電子書籍として自分で購入し、タブレット端末に入れていきます。長期出張の相伴には、何冊でも制限なく持ち歩ける電子書籍が本当にありがたいですし、チャック付きビニール袋に入れると、お風呂の中でも読めるのです。紙の本だとシワになつたりするのが嫌なのですが、電子書籍なら読みながら長湯が可能♪

さて、最近、良かったと思う本をいくつかご紹介しよう。

日本では文系・理系を分ける意識が強いことが、理系に進む女性を排除していると考えられますが、『文系と理系はなぜ分かれたのか』(隠岐さや香著、星海社新書)

では国内外の学術の歴史を辿りながら、日本の近代化の流れの中で「実学」や「窮理」が重んじられるようになる、「理系」の諸学が定まっていたことを紐解きます。東北大学の開学の理念の一つに「実学尊重」があります。この頃の「実学」とは「虚学」に対する概念であって、必ずしも「役に立つ」ことを意味していた訳ではありません。江戸時代末期から明治時代初期に、漢学の素養を生かすことにより、欧米の専門用語や概念に翻訳語を当てていったことが、日本で急速に実学の取り込みに貢献したという側面もありますね。

中根千枝先生の名著、『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書）と『タテ社会の力学』（講談社学術文庫）は、それぞれ一九六七年と一九七八年に上梓された「日本論の古典」として有名ですが、日本社会を理解する上で、もっと早く読んでおくべきだったとつくづく後悔した本です。労働力不足解消とインバウンド需要を狙って国際化が進行する中、平成の三〇年間、ついに変わらなかつたこのタテ社会を、令和の時代にどのように世界と合わせしていくのかは難問です。

東北大学の卒業生、瀬名秀明さんの近著『魔法を召し上げ』（講談社）は、久しぶりに読んだフィクション。

二〇二〇年に開催される東京オリンピックから一〇年余ほど後の設定で、弱冠二〇歳のマジシャンの主人公ヒカルの相棒として、少年型ロボットであるミチルが登場します。主な舞台がモレキユラーキユイジーヌを供するレストランというのも斬新。分子ガストロノミーと称されることもありますが、物理や化学の力も駆使した前衛的な料理は、確かに人の心に魔法をかけますね。二〇〇五年に上梓された『デカルトの密室』（新潮社）で登場するヒューマノイドロボットのケンイチの面影が見え隠れするので、ストーリーはさらに続くのかもしれない。

料理つながりで、『スープ・レッスン』（プレジデント社）という料理本も挙げておきましょう。筆者の有賀薫さんという方は、三六五日、スープを作り続ける「スープ作家」、というセルフブランディングを成し遂げた点で、これまでの料理家さんたちと大きく異なると思います。ブログやSNSのような媒体でも随時、発信を続けているという点も、現代的なスタイルですね。何より、体も心も癒すスープで、簡単、美味、少人数向けというのが、人気を博す根拠となっているのでしょう。

最後に筆者が分担執筆で関わった本をご紹介します。四月に発行された『自閉症学』のすすめ オーティズム・ス

「タディーズの時代」（ミネルヴァ書房）は、心理学、精神病理学、哲学、文化人類学、社会学、法律、文学、生物学、認知科学の九章と、九つのコラムの執筆者あわせ、一八の視点から自閉症をとらえた学際的な内容の本です。筆者はもちろん、生物学の立場。自閉症学への多様な関わり方から、現代という時代と人間理解を深めることを試みようとしています。

人類が楔形文字を持つようになった頃からすでに、文書を整理して保管する図書館的な機能を持った場所は存在し、当時は理系も文系もありませんでした。デジタルな媒体により蓄積され続けている莫大な量の情報は、私たちの本棚だけでなく、図書館のあり方も大きく変えようとしています。リアルな紙の本が与えてくれるエモーショナルな感覚と、電子書籍の便利さの両方を享受できる幸せを楽しみたいと思います。

（おすすめ のりこ・東北大学副学長・附属図書館長）



ε 星

帰郷——「若手研究者出版助成」から
再起の地 仙台

山 本 史 華

「山本さんは……哲学をおやめになつたらどうでしょう」

大学院の修士課程に在籍していたときのこと。修論の指導を受けるために、指導教授の研究室を訪ね、その際に言われた言葉だった。良家の子女だったことがうかがい知れる、丁寧な言葉遣いの裏には、もはや私が修論を指導してもらえないこと、そして博士課程には進学できないことが示唆されていた。

「や、やめません……」

咄嗟の宣告に理性が追いつかず、小声で、そう言い返して研究室を去った。だが、いま振り返ると、その時何かを言えるほど自分が冷静だったとは思えない。もしかしたら、言い返したというのは記憶の捏造かもしれない。哲学を真剣に学びたいと思いついたのは高校二年のときだ。型破りな国語の教師が指定の教科書を使わずに、

大森莊蔵の「真実の百面相」（『流れとよどみ』）という哲学エッセイを配り、授業をしていた。その内容が衝撃的だった。それまでは、物理が好きで、将来はNASAに勤めるのを夢見ていたが、「物理学を極めても真理は解らない。やるなら哲学だ」と青臭い野望を抱いてしまった。

哲学の課題のなかでも、特に関心が向かったのは言葉だった。そもそも人はなぜ言葉を話すのか、その言葉とは何か、言葉で人は何をどのくらい表現でき、それらを共有しあえるのか。考えたところで答えがあるのかさえわからない、こうした問いに突き動かされながら、慶應義塾大学に進学した。選んだのはワイトゲンシュタイン。天才と呼ばれる哲学者の奇書『論理哲学論考』に取り組んだ。

ところが、『論考』は想像以上に難解で、修士に進んだ頃、まるでエッセイの絵にでも迷い込んだかのように、思考が堂々巡りしてしまっていた。おまけに指導教授からは何度も「山本さんのご主張は理解しかねます」と言われ続け、ついにある日、先のような形で引導を渡されてしまう。修士課程は、急遽、指導教授を変更して修了したものの、案の定、私は博士課程には進学できな

かった。

どうしようか。私は哲学をまだ諦めきれなかった。

大森莊蔵門下からは優秀な研究者が何人も輩出されているが、東北大学の哲学科には、そのなかの白眉とも言える野家啓一がおり、当時、単著を三冊も立て続けに上梓していた。現象学と分析哲学。一見、水と油の関係のような二つの哲学を、明晰な分析力と博学に裏打ちされた総合力でもってつなぎ合わせ、独自の切り口で捌いていくその姿勢は、大森哲学を読んだとき以上の衝撃があった。どうせならば、この人のもとで研究したい。捲土重来を期して、私は東北大学大学院哲学研究科の門をたたき、博士課程から編入学したのである。

東北大学は、慶應義塾大学とは明らかに校風が異なっていた。昔ながらの大きな雰囲気が残っており、どんな研究でも許す懐の深さがあった。私は一気に解放された気分になった。学友もみな個性的で、事あるごとに行われる飲み会では、教員と学生が明け方まで議論しながら飲み続けるのが日常風景だった。

そしてまた、東京生まれの東京育ちだった私にとって、仙台という街はとても住み心地がよかった。大都会でなく、かといって田舎でもない。山も海も近くにあるため

食材が新鮮で、食べ物がおいしい。結局、十数年生活して、冬の寒さとホヤの味だけは慣れなかったが、様々な意味でバランスのとれた街だと感じた。

仙台の地で、私は特定の哲学者の研究をやめることにした。そして、言葉の問題を言葉だけで解決しようとせずに、それ以外の領域と関連させながら考察することを目指した。以上のような観点のもとで選んだテーマが「人称」である。それはまた「パーソン」「人」の研究、倫理の領域へ踏み出す研究でもあった。

拙著『無私と人称』には、ワイトゲンシュタインのこととは一切出てこない。この書は、一度つまずいた私が、生まれ変わるために、自分の故郷＝原点を再構築していく過程の記録である。いまでは若手研究者から立派な中年研究者になってしまったが、自分の哲学研究の原点がそこには記されている。

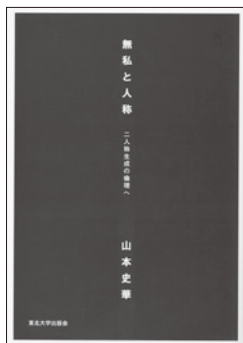
(やまもと ふみか・東京都市大学准教授、哲学・倫理学 平成一六年東北大学大学院文学研究科博士課程修了)

山本史華 著

無私と人称

二人称生成の倫理へ

A5判・二九四頁・定価(本体三〇〇〇円十税)



【第二回 東北大学出版会若手研究者出版助成刊行図書】



と星

『キャリア形成支援の方法 論と実践』

書評

菅原良 松下慶太 木村拓也 渡部昌平 神崎秀嗣編著

猪股歳之

大学におけるキャリア教育は、バブル崩壊後の長引く景気の低迷を背景の一つとしながら導入が進められてきたが、制度的な導入過程は二〇一一年の大学設置基準の改正によって完了したとみることができると。財政的にも二〇〇六年度から「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に「実践的総合キャリア教育の推進」が募集テーマとして設定され、二〇一〇年度には「大学生の就業力育成支援事業（就業力GP）」が公募されるなど、競争的資金による支援も行われてきた。

二〇一〇年の「就業力育成に関する学長調査」（リクルートカレッジマネジメント・リアセック）によれば、「就業力育成授業」を正課で実施していない大学は一二％で、すでに多くの大学でキャリア教育科目の授業科目化が実現していたことがうかがえるが、授業の担当者（複数回

答）は「専任教員（キャリア教育の専門家）」が四六％である一方で、「一般の教員」五八％、「非常勤教員（キャリア教育の専門家）」四九％、「アウトソーシング」二七％など、専門家以外や学外者によって実施されていた部分も大きかった。

こうした状況から一〇年ほどが経過した現在の大学におけるキャリア教育の取組みを伝えてくれているのが本書である。中心に大学におけるキャリア教育を据え、周辺との関係を視野に収めつつその「方法論と実践」について豊富な事例を収録している。読み応えのある実践報告の数々は、まさに十年一昔を実感させる。

本書は三つのパートから構成されており、その第一編は、高等学校の生徒指導・進路指導と大学のキャリア教育との「接続」をテーマとして四つの章からなる。高校までのキャリア教育と大学におけるそれとの連続性や大学初年次教育におけるキャリア教育の取組みなどが取り上げられている。

第二編は、大学におけるキャリア教育と専門教育との「交流」をテーマとして、六つの章が収められている。高年次の学生を対象としたキャリア教育の可能性や、経営学、看護師・医療専門職・医療事務職養成、といった

専門分野の授業科目におけるキャリア教育の導入例などが扱われている。

そして第三編は、大学から社会への「移行」がテーマとなっている。社会人モデルの参加やフィールドでの学習といった学外の資源を活用しながら取り組まれている授業科目の事例など八章が盛り込まれている。

本書は全編を通して比較的自由なスタイルで執筆されており、それ故にそれぞれの執筆者がキャリア教育に抱く熱い想いを直截に表現することに成功していると見ることができる。しかし、本書の趣旨からみてやむを得ない側面はあるものの、大学のカリキュラムにおけるキャリア教育の位置づけやその変化についての検討が十分でなかったことは残念である。例えば、キャリア教育を大学に新しく導入された教育内容と見るならば、既存のカリキュラムへの参入は難しい課題である。特にディシプリンに基づく専門科目群のなかに新たに位置づけていくことは容易ではない。実際、キャリア教育科目は、初年次教育への関心の高まりと重なり、全学組織の教員が担当する低学年向けに開講される教養科目として導入されることも多かった。カリキュラムにおけるキャリア教育の位置づけは、授業科目としてのさまざまな実践の基盤

となるものであり、その有り様がキャリア教育のさらなる発展にとつて重要な意味を持つと考えられる。

とはいえ、各大学における現在のキャリア教育の取り組みを垣間見ることができるところで本書が果たす役割は大きい。かくもバリエーション豊かな、そして意欲的な取り組みが全国各地の大学で蓄積されているという事実を改めて認識するとともに、新しく登場してきたキャリア教育がどのように大学のカリキュラムに位置づけられていくのか、その理念をどのように実際の教育内容・授業科目に落とし込んでいくのか、今後の可能性を探る上で本書は貴重な示唆を与えてくれる。

(いのまた としゆき・東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授、教育社会学・高等教育論、東北大学大学院教育学研究科博士後期課程修了)

菅原良 松下慶太 木村拓也 渡部昌平 神崎秀嗣 編著

キャリア形成支援の方法論と実践

A5判・三四二頁・定価(本体三三〇〇円十税)



7星

東北大学出版会だより 32

本の力を問い直す

佐倉 由泰

縁あって、東北大学出版会の出版会議に出席するようになってから四年以上が過ぎた。出版会議は月に一回、主に第一月曜日に開かれる。夕方の六時から一時間半ほどの議事がなされることが多い。私は、物事をしつかりとした見通しを持って突き詰めて考えるのが苦手で、継続することではかその弱点は補えないと思い、当初からできるだけ休まないことを心に期していたが、そうした決意にも増して、出版会議の場に身を置くことが何やらとても楽しく、おかげさまで、年に一回休むか、皆勤かという度合いで出席してこれた。他の仕事がいそがしい時でも、川内の文学研究科から片平の出版会に出かけることに、不思議にもさほどの負担を感じていない。会議の始まる夕暮れ時は、季節ごとに残照の明暗の加減が異なるが、その建物の入口あたりはいつもいい風が吹いていて、四季折々の妙趣をしみじみと感じながら、これま

で約五〇回、出版会の扉を開けて、議事に参加してきた。その議事では、昨今の出版をめぐる状況から、厳しい現実を突きつけられることも少なくない。決して愉快なことばかりではない。さまざま困難を乗り越えてたゆまず本の編集、出版を重ねることが課されている。本を買ってもらえることも常に勘案しなくてはならない。事務局で働く方を三名から一人でも増やすことが近年の悲願であるが、まだ達せられていない。そうした中で、小林直之事務局長をはじめとする事務局のみなさんの誠実な努力には、本当にいつも頭が下がる。専門を異にして集う、他の理事のみなさんの発言や姿勢に接し、自身の不明、不熟を省みることも多い。久道茂理事長の、細心の配慮をもつて勘所を押さえつつ、ユーモアを交えて悠然と事を運ぶ姿には、くり返し感嘆させられる。出版会のある古い建物の扉の向こうでは、知を尊ぶ確かな営為が重ねられている。その中心にあるのは、本である。

東北大学出版会のすべての機縁の要は、本なのである。本というものの、人の心を動かし、躍らせる力が、私を進んで出版会議に向かわせてもいる。思えば、私は、子どもの頃から、内容、外貌ともに本というものが至って好きで、それが、そのまま、日本の古典文学の研究、教

育に携わる生き方につながってきたようである。世に注目されていない古典籍の記述にも、独自の意義と魅力を見出し、それを論ずることを生きがいにしてきた。そうした私にとって、本好きのメンバーが集まり、これからの出版について考え、意見を述べ合う場が好ましくないはずはない。それぞれの本には、固有の貌がある。タイトル、内容、外装、質感等が相俟った、かけがえのない貌である。こうした貌を持つ本には、電子データにはない、独特の力がある。

その力を問い、本とは何かを考え続けることを、私は自身の課題にして行きたい。私が出版会議に出席することは、この問いと思考をくり返すことを意味する。本は読まれなくなってきた。売れなくなっている。紙媒体による出版はすたれ、電子データによる流通がいつそう盛んになっても行くだろう。しかし、だからこそ、今、本の持つ意味と力を根源的に問い直したいと思う。その意味と力はただ失われてしまっただけのものではない。それが何なのかをまっすぐに考えておく必要がある。本が好きで本を読み、その上で、文学の研究をして、授業も行い、出版会議にも進んで参加してきたのだが、なぜ自分本が好きなのかをさらに掘り下げて考えるべき時が

やってきたようだ。そして、出版についての新たな企画や、新たにでき上がった本とめぐり合う中で、本の新たな可能性というものを発見できたとしたら、どんなにうれしいことかと思う。

みなさまのたいせつな思考の成果の結晶としての出版の企画をお寄せください。お待ちしております。

(さくら よしやす・東北大学大学院文学研究科日本文学専攻分野教授)

科研費による出版を承ります。

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費(学術図書)」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声がけ下さい。「見積書」「発行部数積算書」等の作成を承ります。

【最近の実績例】

■平成三〇年度

西田文信著 『ナムイ語文法の記述言語学的研究』

高橋美能著 『多文化共生社会の構築と大学教育』

高橋秀太郎・森岡卓司編 『一九四〇年代の(東北)表象

文学・文化運動・地方雑誌』

■平成二九年度

尾園絢一著 『パーニ二が言及するヴェーダ語形の研究

重複語幹動詞を中心に』

七月三十日の遅い梅雨明け宣言、暑い夏がようやく来たと思つたら、三五度を越える酷暑が続いています。地球温暖化のお陰で、東北は住み易くなったと密かに思つた時もありましたが、今では、命に関わる時代が来そうな不安を覚えるようになりました。

さて、編集委員会ですが、毎月、事務局が整理した議事に沿つて、新しい出版申請、印刷会社の見積もり、出版の進捗状況、経営全般そして今後の見通しなどについて、話し合います。その中でも一番の関心は、新しい出版申請がどれだけあるかということです。

委員会では、申請の出版構想と原稿を拝見し、適切な専門家に査読をお願いします。査読者からの評価が出された段階で、これを参考に内容の妥当性や市販性について話し合います。委員会の判断をふまえて、事務局は著作者と連絡をとり、修正や出版の条件などについて詰めの交渉を重ねます。条件が整いしだい、印刷・校正へと進み出版となります。

ぜひ、多くの方々から、出版したいという相談を事務局等にしてほしいと思います。申請から出版まで、六か月ほど要しますので早めにご相談ください。

学術出版をお考えのみなさまへ

専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシードイングスなどの出版をご希望の方は、ぜひ小会宛にご連絡ください(連絡先は表紙面参照)。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談させていただきます。

宙

(おおぞら) に輝く北斗の七つの星に寄せて、
東北大学出版会が読書人に贈るエッセー
第三二二号

内 容

α 星

β 星

γ 星

δ 星

ε 星

ζ 星

η 星

教授)

自著を語る『自閉症とアスペルガー症候群 対応ハンドブック』／仁平説子 (臨床発達心理士)

情報に関わる制度のこれから／蘆立順美 (東北大学大学院法学研究科教授)

生命分子の起源を探る／古川善博 (東北大学大学院理学研究科准教授)

私の本棚／活字好き／紙でも電子でも／大隅典子 (東北大学副学長・附属図書館長)

帰郷「若手研究者出版助成」から／再起の地 仙台／山本史華 (東京都立大学准教授)

書評・菅原良 松下慶太 木村拓也 渡部昌平 神崎秀嗣編著・東北大学出版会

二〇一七年刊行『キャリア形成支援の方法論と実践』／猪股歳之 (東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授)

東北大学出版会だより32／本の力を問い直す／佐倉由泰 (東北大学大学院文学研究科